

「私たちは、綿をつめた
りしないよ。生まれたま
まの体でいくのだから。メ
ガネや入れ歯も、何もいら
ないというふうを話して
の。」そんなことを話して
から、二人の看護師さんが
手際よく母にお気に入り
る。母が普段使っていた洗
面器に汲んだお湯で体を拭
いていく。私もそれを手伝
いながら、不思議な気持ち
になる。そう、母はつい今
し方亡くなった。それなの
にこの穏やかさは何なのだ
ろう。訪問看護師さんから
の連絡でお見えになって
「十二時二十八分です。」

「そう先生はおっしゃった。
もう一人大好きな母が亡く
なったのだから、悲しくな
いわけがない。でもテレビ
ドラマのご臨終の場面とは
どこか違う。ここは私の家
である。母の体には点滴の
ための針もついてなければ
は、心電図を示すモニター
も見あたらない。急を聞いて
駆けつけて泣き崩れる家
族もいない。あれから一年
以上になる今でも、あのと
きの穏やかさを忘れられな
い。

八十歳の母はがんであっ
た。体力的に抗がん剤治療
がでなくなくなり、あとは在
宅でということになった。
時、共働きの我が家での看
取りができるとは思えもし
なかつた。しかし、世の中
は変わっていた。訪問介護
と訪問看護を組み合わせた
ことで、私の留守中も母が
困らないようにできるとい
う。大病院から紹介され

い。(ただし、脱水の症状
が出たら、そのための対応
はする)という説明も受けて
いた。「一方で、痛みの緩
和にはきちんと薬を処方し
てつらい思いをしないよう
に、また、酸素の機械(ペ
ッド)を搬入して呼吸を楽
にする」と話した。先生は
母の病気の進行を診て、そ
の都度母の意向を尊重しな
がら必要な処置や処方をし

医師の説明を、母も同席し
て聞いた。以来、母は自分
の病気と正面から向き合っ
て勉強してきた。病状の変
化にともない主治医も変わ
り、大病院で摘出手術を
受けたり、抗がん剤治療を
したりする間に、自分の体
を自分でしっかり知り知っ
ていた。もちろん担当医たち
の説明はいつも丁寧だっ
た。しかし、血液検査の数

私にもそれらの冊子類は
手渡されていた。だから、
私は母と最後まで隠しごと
のない会話をすることがで
きた。私が口に出したくな
い言葉を飲みこんでいるこ
とも承知して、「わか
っているよ」と優しく言う
のだった。そんな母だった
から、こうして先生に自分
の望む最期の迎え方を伝え
られたのだと思う。「食べ
られなくなったらそのまま
でいい」ということは、母
の口から兄や姉にも伝えら
れていた。

日本医師会賞

手をつないだまま母は逝った



50 子 伸 子
大 竹 伸 子
木 教員

種やかな死だった。先生
から聞いていた通りに眠る
ように静かに亡くなった。
人の死は本来こうあるもの
なのだと思ふ。人はいつか
死ぬ。その時の医療は、従
来の治療のためのものとは
違うものであってもいいと
思ふ。



ほとんど食べられなくな
った母は痛み止めのために
処方された薬のせいもあっ
てか眠っている時間が長
くなった。亡くなる前の晩、

た先生が在宅診療の専門家
でいらつしやう。訪問看
護ステーションのスタッフ
には二十四時間の対応をお
願ひできた。しかし、これま
で接してきた病院で行われ
る医療とは大きく違ってい
た。先生のお世話になって
から、母は一度も注射針を
打たれることが無かつた。

検査のための採血も、点滴
も無かつた。食が細くなっ
ていくのは自然なことだが
臆がんで、無理な栄養補給はしな
か

てくたがった。在宅での看
取りはお医者様がリードす
るといふより、患者本人と
家族が納得して望んで行わ
れるという感が強かつた。

思えば五年ほど前、体調
が悪くて地域の総合病院を
受診した時の問診票、「ガ
ンであった場合告知をのぞ
みますか」という質問に母
は「いいえ」と答えていた。

「私は腫瘍病だから」と言っ
ていた。しかしその後、臆
がんで見つけたという
薬のこと。さらに、娘

「私たちは、綿をつめたりしないのよ。生まれたままの体でいくのだから。メガネや入れ歯も、何もいらぬというふうを考えるから。」そんなことを話しながら、二人の看護師さんが手際よく母にお気に入りのパジャマを着せてくれる。母が普段使っていた洗面器に汲んだお湯で体を拭いていく。私もそれを手伝いながら、不思議な気持ちになる。そう、母はつい今し方亡くなった。それなのにこの穏やかさは何なのだろう。訪問看護師さんからの連絡でお見えになって「十二時二十八分ですね。」そうO先生はおっしゃった。もちろん大好きな母が亡くなったのだから、悲しくないわけがない。でもテレビドラマのご臨終の場面とはどこか違う。ここは私の家である。母の体には点滴のための針もついてなければ、心電図を示すモニターも見あたらない。急を聞いて駆けつけて泣き崩れる家族もいない。あれから一年以上になる今でも、あのときの穏やかさを忘れられない。

八十歳の母はガンであった。体力的に抗ガン剤治療ができなくなり、あとは在宅でということになった時、共働きの我が家での看取りができるとは思わなかった。しかし、世の中は変わっていた。訪問介護と訪問看護を組み合わせることで、私の留守中も母が困らないようにできるという。大学病院から紹介されたO先生が在宅診療の専門家でいらっしゃった。訪問看護ステーションのスタッフは二十四時間の対応をお願いできた。しかし、これまで接してきた病院で行われる医療とは大きく違っていた。O先生のお世話になってから、母は一度も注射針をうたれることが無かった。検査のための採血も、点滴も無かった。食が細くなっていくのは自然のことだから、無理な栄養補給はしない。(ただし、脱水の症状が出たら、そのための対応はするという説明も受けていた。)一方で、痛みの緩和にはきちんと薬を処方してつらい思いをしないように、また、酸素の機械(ベッドサイドにおける小さなもの)を搬入して呼吸を楽にすることはした。先生は母の病気の進行を診て、その都度母の意向を尊重しながら必要な処置や処方をしてくださった。在宅での看取りはお医者様がリードするというより、患者本人と家族が納得して望んで行われるという感が強かった。

思えば五年ほど前、体調が悪くて地域の総合病院を受診した時の問診票、「ガンであった場合告知をのぞみますか」という質問に母は「いいえ」と答えていた。「私は臆病だから」と言っていた。しかしその後、膀胱ガンが見つかったという医師の説明を、母も同席して聞いた。以来、母は自分の病気と正面から向き合って勉強してきた。病状の変化にともない主治医も変わり、大学病院で摘出手術を受けたり、抗ガン剤治療をしたりする間に、自分の体を自分でしっかりと知っていたと思うようになっていた。もちろん担当医たちの説明はいつも丁寧だった。しかし、血液検査の数値をメモしたり、いただいた検査データ票をきちんと整理していたりというのは本人の心がけがなくてはできないことである。病院の待合室においてある小冊子などは必ず目を通していたし、新聞の医療関連記事は切り抜いて保管してもいた。そうして、母は、最後に自分がどんなふうになるのかをすべてわかっていた。痛みのこと、処方される薬のことも。さらに、娘の私にもそれらの冊子類は手渡されていた。だから、私は母と最後まで隠しごとのない会話をすることができた。私が口に出したくない言葉を飲み込んでいることも承知していて、「わかってるよ」と優しく言うのだった。

た。そんな母だったから、こうしてO先生に自分の望む最期の迎え方を伝えられたのだと思う。「食べられなくなったら、そのままがいい」ということは、母の口から兄や姉にも伝えられていた。

ほとんど食べられなくなった母は痛み止めのために処方された薬のせいもあってか眠っている時間が長くなった。亡くなる前の晩、兄も姉も家族を連れて我が家にやってきた。総勢十五人、みんなでお別れをした。母の大好きな「埴生の宿」を私の娘がバイオリンで弾いた。「お母さん、聞こえる。みんないるよ。」とよびかけたら、「うん。」と確かに答えてくれた。それを聞いてみんなは帰っていった。その晩、私は母の隣で眠った。朝になって家族を送り出してからも、ずっと手をつないでいた。だんだん冷たくなり脈もわからなくなっていく手をさすり続けているうちに、母は旅立っていった。その時そばにいたのは実際には私一人だった。でも、家族みんなで送れたと感じている。たくさんの医療や介護のスタッフ全員に見守られていたと思える。

穏やかな死だった。O先生から聞いていたように眠るように静かに亡くなった。人の死は本来こうあるものなのだと思う。人はいつか死ぬ。その時の医療は、従来の治療のためのものとは違うものであってもいいと思う。

以下大竹氏からの受賞の報告 平成 25 年 1 月 12 日 Original Message

大竹でございます。心に残る医療体験コンクールの入賞の件、本当でした。昨年先生に連絡した後には私の早とちりだったらお恥ずかしいと思っていたのですが、先日表彰式の招待状が来ました。娘と一緒に行ってきます。

ちょっとうれしい副賞もいただけそうで感謝です。先生の在宅医療推進の活動の中で拙文がお役にたてることがありましたら、どうぞお使いください。

文章の権利は読売新聞に帰属することになりますが、2月2日付け紙面で全文掲載されるそうなので、そちらの転用で示すにはあまり問題がないと思います。

医療関係の方たちが本当に「死に方」についての新たなモデルを構築しようという流れがあるのだと感じます。私たちの世代が今直面している親世代の死と自分たちの死との両方をどのようにしていきたいのかを他人任せでなく考える時期になったと感じています。

母を始め親の世代は「人はいつか死ぬ」という自明のことを覚悟した過去を持っている世代ですが、私には死は恐ろしく忌むべきものでした。でも、娘はそうは感じていなかったようです。母が死んだ日の午後に帰宅した娘がこんなことを言いました。「おばあちゃんのベッド、気持ちよさそうだったから少しの間私が寝たかったのに、もうかたづけちゃったの。残念。」レンタル業者が気を利かせてその日のうちにベッドを持って行ってしまったのを見た感想です。それを聞いて私は正直驚きました。人の亡くなった所で眠りたいなんて考えもしなかったからです。

不浄というわけではないまでも、ちょっと近寄りたいたい思いがありました。でも後になって思いました。ほんの数時間前まで私もそこに横になって母と手をつないでいたのに、その場所が母が亡くなったことでそれまでとは違うものの感じてしまった自分が滑稽に思います。何の先入観もなく母の死を間近に経験した娘には、人の死は恐ろしい

ものではなく、昨日の続きの今日があり、昨日の生の続きの今日の死が至極自然のこととして、とらえられたのだと思います。

高度成長期の日本で育った私たちの世代だけが、おかしい感覚になりつつあったのだと反省してます。まだまだ無垢な娘世代まで、死を恐れ忌み嫌う世代にはいけません。本来の日本人は(どこの国の人でも)死はもっと自然で近い存在だったはずです。こんなことに気づかせていただいたのも、在宅での看取りのありがたさです。